

小 特 集

趣旨説明と若干の補足

この小特集は、2016年12月11日、共同研究「日本宗教史像の再構築」（2014～16年度、代表者・大谷栄一）の一環として開催したワークショップ「高取正男を読みなおす」に基づいたものである。プログラムは下記のとおり（所属は開催時）。

菊地暁（京都大）趣旨説明

黛友明（大阪大DC）「高取正男と「贖罪」の共同体」

土居浩（ものづくり大）「高取正男のモノ論」

林淳（愛知学院大）「『神道の成立』と黒田俊雄」

西村明（東京大）コメント1

関一敏（九州大名誉教授）コメント2

中牧弘允（国立民族学博物館名誉教授）コメント3

その際、コーディネイターを務めた筆者が以下の趣旨説明を行った。

今回のワークショップ「高取正男を読みなおす」は、誤解を怖れずにいえば、「高取正男ファンの集い」である。生誕（1926）から90年、没年（1981）から35年を数える高取の学問は、いまだ、妖しい魅力を放っている。高取は、面白い。その魅力の由って来たるところを今一度考えてみるのが、本ワークショップの目的となる。ファンとしてもいただけない所、その後の研究史において修正された箇所は、それはそれとしてキチンと押さえることとして。

高取の魅力は大きく3点にまとめられる（月並みな整理になるが）。一つは、ファクト・ファインダーとしての高取。史料読解、フィールド調査、そして膨大な読書から、高取は、実に興味深く、そして考えるべき出来事を拾い上げて来る。『日本的思考の原型』（1975）冒頭に「私ごとから書き始めて恐縮だが」と述べつつ記された高取本人とその妹との「“ワタシ”の茶わん」をめぐる会話など、印象的な記述が次々と思ひ浮かぶ。日本の歴史

／文化／民俗／宗教に関心を寄せる読者はみな、高取のテキストに、何かしら、不思議と引っかかる出来事を発見できるはずだ。

こうした出来事コレクターとしての魅力は、個々の現象を的確に名付けていくワード・メーカーとしての高取によって補強される。既知の事例でありながら、高取の解説によって腑に落ちるものは少なくない。たとえば、宮本常一の代表作『忘れられた日本人』（1960）の中でも印象的な場面の一つである対馬の「村の寄り合い」の一節は、それ自体きわめて優れた報告であることは確実だが、そこから「ことよせの論理」という共同体を規定する重要なロジックを摘出したのは、おそらく高取の功績である（『日本の思考の原型』）。

このような魅力は、つまるところ、コンテキスト・プロヴァイダーとしての高取によって裏打ちされている。無数の出来事を適切に文脈化する力、そのようなマクロな文脈を構想する力である。これによって、興味深い出来事の紹介が、単なる紹介にととまらず、長期的で基底的精神史の在りようをあぶり出す強力なアプローチとなる。「僧侶の柏手」（『神道の成立』）に、仏教の定着に抵抗する意識化された宗教として「神道」の始動を見出す視点など、その最たるものといえよう。

今日、「日本の思考」や「原型」といった大仰な物言いは影を潜めたように見受けられる（少なくともアカデミズムの内部では）。オリエンタリズム批判以降、安易な本質化を警戒し、多様で錯綜した歴史の細部をすくい上げる作業が前景化されたことは事実であり、また、正当でもあった。しかし、その反作用が、日本論や原型論に対する「本質主義的」という紋切り型の批判を産み出し、また、マクロなコンテキストを思い描く営みそのものを放棄することにつながったとするなら、その弊害も看過できない。ミクロな営みのもつ繊細な手触りを失うことなく、その累積としてのマクロなコンテキストを構築すること、ものごとを人類史あるいは自然史的視点で観察していくことは、今なお未完のプロジェクトであり続けている。

歴史と民俗というフィールドに対峙し、両者の距離感を模索し続けた高取正男。その軌跡と作品が放つ妖しい魅力に、未完のプロジェクトに迫る手がかりを探ってみたい。

上記の趣旨に対して、3名の報告者、3名のコメンテーターに濃密な議論を展開していただいた。その熱気は本特集で読者に届けられることだろう。なお、サブタイトル「ワタクシの生理と神道の成立」は、本特集に際して新たに付したものである。

以下、ワークショップを通して筆者が感じたことを記して覚え書きとしたい。

ディスカッションではご参加いただいた諸氏から活発なご提言をいただいたが、なかでも印象深かったのは森弘子氏の「高取先生って民俗学者だったのかしら」というご発言である。京都女子大学で高取に学び、九州地方の山岳信仰を中心に精力的な研究を続けられる氏は、高取に歴史学の基礎をみっちり仕込まれたという。たしかに、高取は民俗事象を貪欲に学び、民俗学の分野に多大な貢献をもたらしたわけだが、その本分はあくまで歴史家だったのだろう。親鸞をめぐるシンポジウムに参加した際、「民俗学者」としての発言を求められた場面でお茶を濁しているのも、「民俗学者」というカテゴリーで差別化されることを峻拒し、自らの発言をあくまで「歴史学的見解」として提起するためのふるまいと受け取って良いだろう（森竜吉編『シンポジウム親鸞：その人と思想』講談社、1973年）。

この点に関して、興味深い証言を見出すことができた。京大国史で高取の後輩にあたる大山喬平（1957年卒、安丸良夫と同期）は、『部落問題研究』所収のロング・インタビューのなかで、高取について以下の発言をしている（大山喬平他「大山喬平氏の中世身分制・農村史研究の軌跡：「領主制・中世村落・身分制」研究から「ゆるやかなカースト社会」論、「ムラの戸籍簿」研究へ」『部落問題研究』213、2016年）。

ところが国史にきたら、研究室の大ボスに高取正男さんがいました。その高取さんが中心になって『フォルメン』（マルクス『資本制生産に先行する諸形態』）の輪読会をやっていました。僕は真面目に勉強しようと思ったから参加させてもらいました。同級生で参加したのは僕だけでした。そうしたらチューターが高取さんで、中村哲さんがサブチューター、あとは狩野久さん、工藤〔敬一〕さんのクラスの人たち。それでずっと『フォルメン』を読んでいた。どういう読み方をしているのか分からないけれど、とにかく読んでいました。そうしたらこれがまた面白くて、未知のマルクスとの出会いでした。マルクスも一所懸命に考えている。こちらも考えて、考えて、それで説明がつく。それで結局、『フォルメン』や『ドイツイデオロギー』を読んでいきました（20-21頁）。

中村哲さんは東京で高校生の時に柳田國男の所に行ったりしているのですね。高取さんは、京都の西田文化史学の系譜をひくと自称していました（22頁）。

高取さんは『フォルメン』を解説していましたが、僕にはよく分かりませんでした。それよりあの人は研究室に座っていて、僕らが三回生で初めて専門課程に進み、授業が終わって研究室に戻ってくると、新三回生を集めて何かうんちくを語るのです。それは面白かったです。少し後になって、網野善彦さんがいろいろ言いだしたようなことと共通する部分がたくさんありました（22-23頁）。

論点は多岐にわたる。西田文化史学の継承者という自意識は学生時代からのものであったことが確認できる（高取の京大入学は西田の公職追放後なのだが）。高取正男とマルクス主義、マルクス主義歴史学との関係も、あらためて検討されて良い課題だろう。高取の社会史的傾向、網野史学との関連も戦後史学史上の重要なテーマだ（高取の急逝を受けて『日本民俗文化大系 6 漂白と定着』の編者をバトンタッチしたことが「日本論」への転機となったことは、網野自身が語っているところである）。

結局のところ我々は、「最終走者の孤独」を想うべきなのかもしれない。京大文化史学の最終走者たることを自認し、民俗学との協同による新たな宗教史像を積極果敢に構築しながら、同学の関心や批評を十分には得られず（あくまで高取の主観においてだが）、独り黙々と探求を続けざるをえなかった高取の孤独な疾走を。

そしてその孤独を宿した作品群は、いまなお我々を挑発して止まない。

（菊地 暁）

高取正男・関連文献

- 和歌森太郎 1957 「書評：竹田聴洲・高取正男共著『日本人の信仰』」『日本民俗学』5/2
 森竜吉 1958 「書評：竹田聴洲・高取正男共著『日本人の信仰』」『日本史研究』35
 米山俊直 1976 「書評：高取正男『日本の思考の原型』」『季刊人類学』7/1
 馬場功 1977 「ひと 高取正男」『季刊人類学』8/1
 島蘭進 1979 「書評：高取正男『神道の成立』」『宗教研究』53/2（通 241）
 中牧弘允 1980 「書評：高取正男『神道の成立』」『民族学研究』44/4
 柴田実 1982 「序」高取正男『民間信仰史の研究』法蔵館
 蘭田香融 1982 「あとがき」高取正男『民間信仰史の研究』法蔵館
 高取正男教授追悼号 1982 『史窓』39
 橋本峰雄 1982 「刊行のことば」『高取正男著作集』1 法蔵館
 柴田実 1982 「解説」『高取正男著作集』1 法蔵館
 川添登 1982 「解説」『高取正男著作集』4 法蔵館
 宮田登 1982 「解説」『高取正男著作集』5 法蔵館
 阿満利磨 1983 「解説 「ワタクシの発見」——高取民俗学の原点——」『高取正男著作集』3 法蔵館
 谷川健一 1983 「解説」『高取正男著作集』2 法蔵館
 林淳 1984 「死のタブーをめぐる一考察 ——高取正男の説を中心に——」『日本民俗学』154
 関一敏 1993 「解説：具体的民俗、意識の宗教史」高取正男『神道の成立』平凡社ライブラリー
 坂内徳明 1995 「解説：フォークカルチュアの遍路びと」高取正男『日本の思考の原型』平凡社ライブラリー
 阿満利磨 1995 「高取正男の「常民」論」『思想の科学』8/31
 松岡正剛 2001.10.30 「409 夜『神道の成立』高取正男」ウェブ連載：松岡正剛の千夜千冊

趣旨説明と若干の補足（菊地）

- 阿満利麿 2010 「解説 織細の精神」高取正男&橋本峰雄『宗教以前』ちくま学芸文庫
- 田中聡 2011 「高取正男『神道の成立』」子安宣邦編『ブックガイドシリーズ 基本の30冊 日本思想史』人文書院
- 中牧弘允 2013 「「祭り」展示のマンドラ」『月刊みんぱく』428
- 菊地暁 2013 「主な登場人物2：京大文化史学派における『先祖の話』受容」『日本民俗学』276
- 土居浩 2013 「ことはそれだけではないだろう：高取正男の読み方思案」『日本民俗学』276
- 長谷部八朗 2016 「高取正男の研究軌跡にみる「カヤカベ教」調査の持つ意味」長谷部八朗編『「講」研究の可能性Ⅲ』慶友社

人 文 学 報

高取正男：年譜と主要著作

	年 譜	著作（〔 〕内は国史学研究室同窓生の動向等）
1926 (0)	3/16 名古屋市南武平町（現・栄町）に生まれる	
1927 (1)		[肥後和男, 山根徳太郎, 国史卒]
1928 (2)		[小葉田淳, 三品彰英, 国史卒]
1929 (3)		
1930 (4)		[柴田実, 国史卒]
1931 (5)		[赤松俊秀, 清水三男, 国史卒]
1932 (6)	3/31 南久屋小学校入学	[池田源太, 高瀬重雄, 欄津正志, 国史卒]
1933 (7)		[国分直一, 国史卒]
1934 (8)		
1935 (9)		
1936 (10)		
1937 (11)	3/31 小学校卒業, 4/1 愛知県立明倫中学校入学	[高谷重夫, 平山敏治郎, 村山修一, 国史卒]
1938 (12)		[奈良本辰也, 林屋辰三郎, 国史卒]
1939 (13)		[石田一良, 五来重, 国史卒]
1940 (14)		[竹田聴洲, 横田健一, 国史卒]
1941 (15)		
1942 (16)		
1943 (17)	3/31 中学校卒業, 4/1 高岡高等商業学校入学	[高瀬重雄 (1932 国史卒) に学ぶ] [直木孝次郎, 国史卒]
1944 (18)	4/1 学制改革により高岡工業専門学校へ編入	[岸俊男, 国史卒]
1945 (19)		
1946 (20)	[陸軍に応召?]	[西田直二郎, 教職追放]
1947 (21)	3/31 高岡工業専門学校卒業	
1948 (22)	4/1 京都大学文学部史学科入学	[黒田俊雄, 国史卒]
1949 (23)		[平岡定海, 国史卒]
1950 (24)		[上田正昭, 国史卒]
1951 (25)	3/31 卒業, 4/1 京都大学大学院入学	[蘭田香融, 国史卒]
1952 (26)		[最澄]『日本史研究』16
1953 (27)	・若狭漁村民俗調査	[上横手雅敬 (旧), 脇田修 (新) 国史卒]
1954 (28)		[固有信仰の展開と仏教受容]『史林』37/2
1955 (29)	12/19 結婚	[日本におけるメシア運動]『日本史研究』24
1956 (30)		[行基さま]『日本歴史物語』8
1957 (31)		*『日本人の信仰』創元社 (竹田聴洲共著) [安丸良夫, 国史卒]
1958 (32)		
1959 (33)	・祇園祭調査 (～1961) ・十津川村民俗調査	[御霊会の成立と初期平安京の住民] (読史会論集)
1960 (34)		[古代の山民について]『史窓』16
1961 (35)	4/1 京都女子大学文学部助教授	[靈異記の歴史意識]『仏教史学』9/2
1962 (36)	・京都府民俗資料緊急調査	[大陸文化の受容]『講座日本文化史』2
1963 (37)	・滋賀県民俗資料緊急調査	[黒田俊雄「中世の国家と天皇」]
1964 (38)	・兵庫県民俗資料緊急調査・鹿児島県カヤカベ調査	
1965 (39)		[鹿児島県始良郡横川町における「ウッガンサー」の祭り]
1966 (40)	4/1 京都女子大学文学部教授	[民俗芸能・研究の手引]『芸能史研究』12
1967 (41)		
1968 (42)		*『宗教以前』NHK ブックス (橋本峰雄共著)
1969 (43)		[排仏意識の原点]『史窓』27
1970 (44)		龍谷大学宗教調査班編『カヤカベ かくれ念仏』法蔵館 (共著)
1971 (45)		
1972 (46)		*『民俗のこころ』朝日新聞社
1973 (47)		*『仏教土着』NHK ブックス, 『シンポジウム親鸞』講談社
1974 (48)		
1975 (49)	・奈良県天川村調査	*『日本的思考の原型』講談社現代新書
1976 (50)		*『生活学ことはじめ』講談社 (川添登・米山俊直)
1977 (51)	1/1 国立民族学博物館客員教授	[神仏隔離の論拠]『月刊百科』176-178
1978 (52)		*『菅原道真』平凡社
1979 (53)		*『神道の成立』平凡社, [後戸の護法神]
1980 (54)		[御霊信仰を理解するために]『史窓』38
1981	1/3 死去	
1982		*『民間信仰史の研究』法蔵館, 編『京女』中公新書
1983		*『高取正男著作集』(全5巻) 法蔵館 (1982-1983)